

世界の癒しに向けたケアリング——宇宙中心ソーシャルワークの観点から

(2008 年度ホリスティック教育研究大会基調講演記録より)

エドワード・カンダ(カンザス大学)

私はアメリカでソーシャルワークを専門としている立場から、そしてまた、学際的な視点からも、お話しします。この機会に、どのようにして自分の意識を拡大するのかということ、改めて振り返る機会になりました。

最初に、ヒューマンサービスに貢献した様々なスピリチュアルな先駆者たちに感謝したいと思います。特にトーマス・マートン(カトリック修道僧、観想的活動家)、インドの社会活動家であるマハトマ・ガンディー、マーティン・ルーサー・キング牧師。彼らはソーシャルワークを専門としたわけではありませんが、本質的な意味で、まさにソーシャルワーカーでした。彼らは、人間が平和で公正な生活をおくり、一人一人が真の自分に出会うような世界を作っていくという上で、本当の活動家でした。

これから、まずソーシャルワークの世界的な潮流について話します。そこから、「宇宙中心[ルビ コスモセントリック]ソーシャルワーク」という観点を明らかにしていくつもりです。

スピリチュアルなソーシャルワークにかかわる価値観

ソーシャルワークの専門家としての使命は、社会正義の文脈において全ての人々の充足状態を向上させることです。通常は、身近な範囲の人間を相手にするのですが、大切なのは、その使命を、全ての存在との関係の中で全人的、統合的なケアを行っていくところにまで拡大していくことです。こうしたことはスピリチュアルな多様性だけでなく、ジェンダー・文化・年齢・能力という様々な形での多様性との接点を持ち、それらを尊重していくことでもあります。これは言葉で言うのはたやすいですが、実践は難しいです。というのも、社会全体においても、またソーシャルワークにおいても、長い間、一般的に狭い捉え方がなされてきたからです。この活動は、ソーシャルワーカー単独ではなく、大勢の人とのつながりを持ちながら、葛藤や衝突を抱えた社会の中に、正義をいかにして生み出すかというものなのです。

それでは、私の言っていることを理解してもらうために、キリスト教や仏教のイメージを見てみます。キリスト教の伝統の中では、「愛」という大切な存在をあらわす、ラテン語の「カリタス」や、ギリシア語の「アガペー」という言葉は、とても大事な意味を持つ

ています。そして「キリスト」とは、自らを犠牲にして捧げる存在という重要な意味を持っています。

私は十六歳の時に、とても単純ですが大切な経験をしました。カール・マルクスの経済学の本を読んでいました。当時、私は「そういう本を読んではいけない、マルクスは悪い人間だ」と教えられていました。しかし、マルクスは、「共産主義というのはあらゆる疎外を取り除く存在である」と書いているのです。十六歳の誕生日の時、寝室でキリストをイメージしながら、「あらゆる疎外を取り除く」とはどういうことか考えていました。すると、思いもかけないことに、私の意識を閉じこめていた殻が破れてしまい、宇宙との深い一体感を体験したのです。それ以来、どうしたらこういう一体感を生きることができるのかとずっと考えてきました。その体験が、私にソーシャルワーカーとしての道を選ばせ、世界中の人とつながる道を歩ませたのです。

次に、大乘仏教の中では「慈悲」は大変重要な概念です。観音菩薩は慈悲を象徴しています。それはケアリングについての強い洞察を秘めています。この「慈悲」という言葉は、サンスクリット語では「カルナー」といい、無限の慈悲の心、霊的な慈悲の心という意味です。十一面観音のそれぞれの顔が様々な方向を向いているように、慈悲は、世界で起きている様々な事柄に向き合い、気づくのです。これはとても感受性の豊かな共感に満ちた姿です。ここでなされる対応は、自我に閉じこめられたものではなく、スピリチュアルな心で物事に向き合うということです。また、阿弥陀仏は、無限の光と意識を持った存在だと言われています。こうした、あらゆる存在に向けての対応は、狭い自我の次元ではなく、もっと深いスピリチュアルな次元から生まれる深い慈悲の心によるものです。そして、千手観音のそれぞれの手にはいろいろな道具が握られています。これは、それぞれ異なる状況に合わせて、必要なものを必要な形で提供する態度を表しています。私にとって、これが宇宙中心的なケアのあり方を象徴しています。つまり、スピリチュアルな次元で物事を知覚し、あらゆる方向に向けて共感とともに、平等で状況に合った巧みな対応をしていく。さらに、それらはすべて宇宙的な響き合いのなかで行われる。このような宇宙的な気づきによる活動がケアリングにおいて必要です。

スピリチュアリティについて

次に「スピリチュアリティ」とは何かということについて確認しておきます。スピリチュアリティとは、人間が生きる意味や目的を求め、道徳的に充実した関係を求める心であると思います。人が自己、他者、宇宙、そして存在の究極的な根元を理解することは、宗教や宗教以外のどんな形態にかかわらず、求めていくことができます。それは、人を信念や価値や実践に向かわせていく重要なものです。それは、宗教的な仕方や

宗教的でない仕方のどちらでも表現可能です。先程私はマルクスについて言及しましたが、マルクスは決して宗教的ではなかったが、スピリチュアリティの定義に照らせば、深い意味でスピリチュアルだと言えます。また、スピリチュアリティは個人的なものであり、他者と共有することもできます。

様々な宗教の教義は、スピリチュアリティをそれぞれ異なった形で捉えたものです。また、宗教は、スピリチュアリティの組織化された表現であり、コミュニティに共有されて、引き継がれていきます。

さらに、スピリチュアリティについて、次のような統合的な定義をすることもできます。さきの定義は、人間の様々な側面の一つとしてのスピリチュアリティの定義でしたが、人間の心理的、社会的、生物的な様々な側面を統合していくという意味で、それを捉えることもできます。統合の中心を「真の自己」あるいは「高次の自己」と呼ぶことができます。これは、それぞれの側面を統合し、それを超越していくあり方でもあります。スピリチュアリティとは、深い自分自身の本来のあり方につながることです。そして、この意味での「真の自己」は、単に個人だけではなくあらゆる存在、全体につながっています。こうした人間の存在の中心としての、かつすべての存在とつながる中心としてのスピリチュアリティです。

瞑想やその他のスピリチュアルな実践を通じて、私たちは自分自身の中心につながっていきます。それは自我中心のプロセスではありません。自分自身の中心とつながればつながるほど、私たちは他者や、その他のあらゆる存在とつながることができます。スピリチュアリティの発展、成長においては、意識が拡大し、自分自身だけでなく、あらゆる存在につながっていくという方向に進んでいきます。

世界のソーシャルワークの歴史的動向

世界的にみて、ソーシャルワークでは、スピリチュアリティを含む意識の拡大が進んでいく方向にあります。現在では、専門家の組織(学会など)がスピリチュアリティの重要性を認め、受け入れています。私自身、アメリカの「スピリチュアリティとソーシャルワーク学会」の創設にかかわりましたが、特にこの十年の間に、様々な実践や研究論文が増え、私が知っているだけでも五十以上の国々でこうした潮流が広がっています。宇宙中心の意識が現実世界のなかで実践を推し進めているのです。専門家たちにとって、いまや心理療法的アプローチや社会正義の戦略と同時に、スピリチュアルなものにかかわる共同体の資源を実際に利用することが可能になってきています。

しかし、それは同時に、宗教的な現状に根ざした様々な葛藤や衝突に直面することも意味します。現実には、宗教間の葛藤や争い、あるいは、そこから生まれてくる様々なトラブルに向き合っていかなければならないということでもあります。

ソーシャルワーカーや他の専門家にとって、現代の課題は、その価値観や知識や能力を広げ、それぞれの国や世界全体で、スピリチュアルな多様性を取り入れていくということです。そうするためには、意識を広げ、活動を拡大していくことが必要です。それとともに、ケアリング自体も、そのあり方を拡大していくことが求められます。

宇宙中心的なケアリングの意識

意識の発達については、ケン・ウィルバーの理論から多くの示唆を得ました。スピリチュアルな成長は、意識の範囲、あるいは行動範囲を大きく拡大するという方向に進みます。私たちは普通、成長段階で青年期を過ぎて、自分が何者であるかという自己のあり方を確立することができるようになります。青年期という発達段階にとって、それは適切なあり方ですが、それだけでは十分ではありません。まず、私たちは青年期に自我中心的な発達をし、自己や家族や集団に重きを置いた自我中心性を育みます。そして、そうした自我中心の見方から、つぎに国家や社会というものを含める見方へと発達していきます。そして、さらに意識は、世界全体へと拡大し、それが宇宙やあらゆる存在をふくむところにまで拡大していきます。

専門家としての経験から言うと、そうした発達は、あるところまでは可能ですが、限界があります。様々な宗教的な伝統の中で育まれてきたやり方は、広い共感力を養うのに適しています。もちろん、宗教にとらわれない形で行われている瞑想も大切です。専門家として、何らかのこうしたやり方を利用して、成長しつづけることが必要です。

意識が同心円状に広がっていくにつれて、ケアリングの範囲も広がります。健全な形のセンタリング(中心をもつこと)は、本質的にケアリングなのです。それは、人を全体性へと向かわせる健全な状態です。それによって他の存在に向かって心を開いていき、自然な共感、他者への思いやりが生まれてきます。

例えば、健康な個人主義は、自己愛的な個人主義とはまったく異なります。また、家族に属して互いにサポートしあうのは非常に大事なことです。しかし、そうした健康な家族との一体感は、身内主義とは全く違います。また、民族的・文化的・宗教的なあり方に誇りを持つこと、それに深くかかわることは健全なあり方です。しかし、そうしたあり方は民族中心主義、人種差別、宗教的な排他主義とはまったく異なるものです。私たちは、こうした要素はとても重要だということと同時に、健全なものとはそうでないも

のの違いがあることを、しっかり分かっておく必要があります。私たちがグループの集まりの中でつながりを感じることはとても重要です。しかし、他者を排除して自分たちだけになることはとても危険です。同様に、国民の団結や国民の権利を自覚することはとても重要です。しかし、それらは外国人排斥主義や植民地主義とは全く違うのです。

また、エコ中心主義やガイア中心主義といった全地球的な気づき、普遍的な人間の権利という意識を持つこともあります。それらは帝国主義や自然を支配するグローバリズムとはまったく異なるものです。

ですから、宇宙中心的ケアリングというのは、ローカルな特定の信条や目的を包括しながらも、それを超えていくあり方です。そこでは、自己と他者の関心を相互に受け入れています。自らの真の中心を、あらゆるものの真の中心と同じものとして経験しているのです。それは、スピリチュアルな意味で、どこにいても自らが平安であるということであり、どこかに囚われてしまうという意味では決してありません。

以上のように、宇宙中心的な意識の発達をみたところで、宇宙中心ソーシャルワークにおける専門家のケアのあり方をまとめます。それは、伝統的、多文化的、国際的な観点を包括し、それを超えています。私たちが人に対して援助を行うときには、それはまたあらゆる存在をも含んでいます。ですから、援助は、個人、家族、コミュニティ、国家、世界、そしてそれらを越えていくものにも向けられることとなります。ローカルな必要性や目的とグローバルな目的を統合していきます。

宇宙中心的なケアリングは、単に物理的、経済的、物質的な拡大や、コミュニケーションの手段が拡大していくという意味ではありません。新しい形での植民地主義や、商業主義的なグローバリゼーションとは異なります。それは、国家主義や、自民族中心主義、エリート的な専門家中心主義に基づいてはならず、宗教的であれ非宗教的であれ、特定の世界観やイデオロギーを押しつけるものであってはならないのです。

宇宙中心的なケアリングの具体的なサポートについては、様々なリソースや方法がありますが、それらをオープンで柔軟な姿勢で活用していくことが大切です。また、政策や組織面での考慮も大切です。

「宇宙中心的」という言葉自体は、私が作ったものです。世界の癒しに向けたスピリチュアルなケアリングというテーマを皆さんに理解していただくためには、言葉にならないものを言葉にすることが大事だったのです。

通訳 村川治彦(関西大学准教授)

